

高校生のソーシャルスキルをイラストで測る IBSST の妥当性検証

○酒井智弘 (筑波大学)
能渡真澄 # (筑波大学)

澤海崇文 # (流通経済大学)
相川 充 (筑波大学)

キーワード：21 世紀型スキル, 高校生, ソーシャルスキル

問題と目的

酒井・澤海・関森・相川 (2019) は, OECD が, 21 世紀型スキルにおいて社会性と情動のスキルの育成を推進しているという背景を踏まえて, 「Illustration-Based Social Skills Test」(以下, IBSST と表記する) の開発を試みた。

IBSST は, OECD の国際学力評価プログラムの対象年齢である 15 歳を基準とし, 高校 1 年生が学校生活で発揮するソーシャルスキルを測定する尺度である。IBSST は, 友人やクラスメイトが登場するストーリーがイラスト付きで描かれており, ストーリーの状況で, 彼らに対する 4 つの行動選択肢それぞれについて, 「する」「しない」の 2 件法で回答を求めるテストである。

本研究の目的は, IBSST に関するデータ (酒井他, 2019) について, 多次元項目反応理論 (cf. Reckase, 2009) による探索的因子分析を用いて再分析し, IBSST の因子を探索的に検討することである。また, 新たにデータを収集して, IBSST の基準関連妥当性を検討することである。

方 法

調査対象者

IBSST の分析に関して, 多次元項目反応理論による探索的因子分析は, 酒井他 (2019) が収集した高校 1 年生 412 名 ($M_{age}=15.81$, $SD=0.40$) のデータを再分析した。基準関連妥当性の検討は, オンライン調査会社に依頼して新たに収集した高校 1 年生 412 名 ($M_{age}=15.86$, $SD=0.35$) のデータを分析した。

IBSST の基準関連妥当性の検討に用いた尺度

高坂 (2010) が開発した, 異質拒否傾向および被異質視不安を測る尺度 (「異質拒否傾向」「被異質視不安」の 2 因子) と, 河村 (1999) が開発した, 高校生の学校生活満足度 (「承認・満足」「被侵害・不適応」の 2 因子) を測る尺度を用いた。

結果と考察

IBSST の因子

多次元項目反応理論による探索的因子分析の結果から, IBSST は, 「自分の思いを表現するスキル」(ストーリー数は 8 個)「主体的に関与するスキル」(ストーリー数は 10 個)「協調して支援するスキル」(ストーリー数は 4 個)「自分の気持ちを整

理するスキル」(ストーリー数は 3 個) の 4 因子で解釈できることが明らかになった。

IBSST の基準関連妥当性

「自分の思いを表現するスキル」「主体的に関与するスキル」「協調して支援するスキル」は, 「異質拒否傾向」「被侵害・不適応」との間に負の相関を示し, 「承認・満足」との間に正の相関を示した。「自分の気持ちを整理するスキル」は「被異質視不安」との間に正の相関を示した。

Table 1 IBSST の基準関連妥当性

変数	異質拒否傾向	被異質視不安	承認・満足	被侵害・不適応
1 自分の思いを表現するスキル	-.15 **	.03	.36 **	-.31 **
2 主体的に関与するスキル	-.27 **	-.07	.49 **	-.23 **
3 協調して支援するスキル	-.15 **	-.09	.25 **	-.14 **
4 自分の気持ちを整理するスキル	-.07	.16 **	.07	-.06

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

以上の結果から, 自分の思いを上手に表現できる人や, 他者との関わり方が積極的かつ上手な人や, 他者に協力的な支援ができる人は, 自分とは違う考え方を持っているクラスメイトや友達を拒否する傾向が低く, 学校生活に不適応を感じず周りから承認されていると感じ, 学校生活に満足していると考えられる。「自分の気持ちを整理するスキル」だけが「被異質視不安」との間に正の相関を示したのは, このスキルが怒りを我慢するというストーリーで構成されていたことによる。この結果は, 怒り感情を表出して, クラスメイトや友人から異質な者と思われることを気にするため, 怒りの感情を我慢していると解釈できる。

引用文献

- Reckase, M. D. (2009). Multidimensional Item Response Theory. Springer-Verlag, New York.
酒井智弘・澤海崇文・関森真澄・相川 充 (2019). 高校生のソーシャルスキルをイラストで測る新たなアプローチ 日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集, 669.

付 記

本研究は, NP0 法人教育テスト研究センター (CRET) における研究活動の一環として行ったものである。